

卵形の不思議

西山 豊 (大阪)

1 転がらない理由

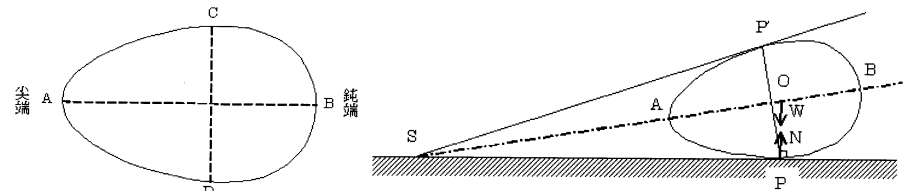
生物学は今ではDNAが一番の話題であるが、形や数に注目してみると数学としての要素が多く含まれている。今回は卵形(たまごがた)の不思議について説明しよう。この話題は1979年8月号の『数学セミナー』に「卵の形」というタイトルで私が発表したもので、ずいぶん前のことであるが、読み返してみても新鮮で不思議に思う。

食材に使う卵の形について、皆さんは不思議に思われたことはないだろうか。卵(たまご)は卵の形をしているから卵形(たまごがた、らんけい)というが、なぜか。まるで禅問答のような問いかけをしたが、その秘密を少しずつ解き明かしていこう。数学では丸い図形の代表的なものは円である。円は中心と半径があれば決まり、これは小中学校で学ぶ。高校になれば楕円というものを学び、楕円は円を横に長くしたもので、2つの焦点(あるいは定点)からの距離の和が一定の曲線である。

卵は円でも楕円でもない。卵は卵形をしている。卵をよく観察すると、中心からの距離が一定の円ではなく、横のほうが長く楕円のような形をしている。さらによく観察すると、横方向でも一方は丸くなっているが、もう一方は尖(とが)っている(図1)。これが卵形である。軸が長い方を長軸、短い方を短軸といい、丸い方を鈍端(どんたん)、尖った方を尖端(せんたん)という。卵は、実際は3次元の物体であるから、円や楕円ではなく球や楕円体で表現しなければならないが、断面で考えても十分であるので、ここでは平面図形で説明する。

卵がなぜこのような形になったのかを考えてみよう。卵を机の上に置いてみる。長軸は机の面と平行ではない。尖ったほうが机の面に近く、丸いほうが机の面か

ら遠い状態で静止する(図2)。楕円の場合は長軸と机の面は平行である。卵がどうして長軸を傾けて静止するかは、卵の重心の位置を考えれば理解できる。円や楕円の場合は重心の位置は上下、左右両端から等距離のど真ん中にあるが、卵の場合は一方が尖っていて一方が丸くなっているから、重心の位置は丸いほうに少しだけずれている。重心が真ん中からずれた卵を机の上に置くとどうなるか。図2に示すように、卵の重心Oからの重力Wと接点Pからの抗力Nが同じ直線上にあり、長軸が傾いて静止するのである。物理学の用語で説明したが、このように卵が傾くことは誰でも知っていることである。



AB:長軸 CD:短軸
図1 卵の形

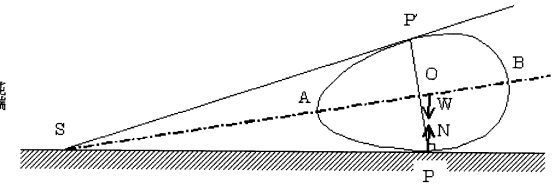


図2 卵は傾く

卵の長軸が傾くとどうなるか。それは斜面上に卵を置いてみると、どのような位置に置いて卵は転がってしまわずにある状態で静止するのである。これが不思議である。静止の状態は、卵の尖ったほうが斜面の上に向き、丸いほうが斜面の下に向くのである(図3)。卵の形にいままで関心のなかった読者はまずこれを実験で確かめて欲しい。

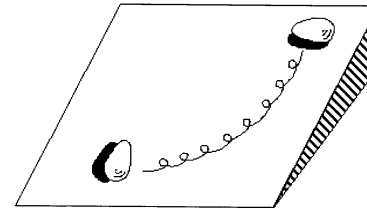


図3 卵は斜面で静止する

私の記事「卵の形」はその後、単行本『卵はなぜ卵形か』(日本評論社)に収録された。この記事を読んで、ある読者から一度だけ抗議を受けたことがある。机を傾けて卵を転がしてみたが卵は止まらなかった。これはウソを書いているので訂正すべきであると言ってきた。私は心配になってもう一度確かめてみたが、や

はり卵は止まった。

ではなぜ読者の卵は止まらなかったのだろうか。多分、読者は机を30度くらいに傾けて転がしたのであろう。机の角度はわずかに5度未満に傾け、卵を手放すときはそっと慎重にしなければならない。図3は斜面を示すための概念図であり、この図から傾斜の角度を30度と読み取ってもらってはこまる。さらに机の面がつるつるだと止まらないことがある。ある程度の摩擦抵抗が必要だ。また、ゆで卵で実験してみたが、ゆで卵の場合は静止しなかったことがある。あるテレビ番組でスタッフが収録用に持ってきた卵がゆで卵であった。生卵は運搬時に割れる危険性があるのでゆで卵にしたと説明を受けたが、ゆでた時に重心が微妙にずれて卵が静止しなかった。また、卵をゆでるとザラザラがとれて摩擦抵抗がなくなることもある。そこで急きょ生卵に変えたことがある。

卵が斜面で転がっても静止することは、紙製のコップでも同じことが確かめられる。紙製のコップは普通、飲み口の円は大きく、底の円は小さい。手に持つ側面の部分を延長していくと円錐になる。卵も紙製コップも円錐で近似(外挿)できる。そこで卵や、紙コップを斜面で転がす問題は、円錐を斜面で転がす問題に置きかえることができる。円錐がなぜ斜面で静止するかを考えるのは、それほど難しくはない(図4)。

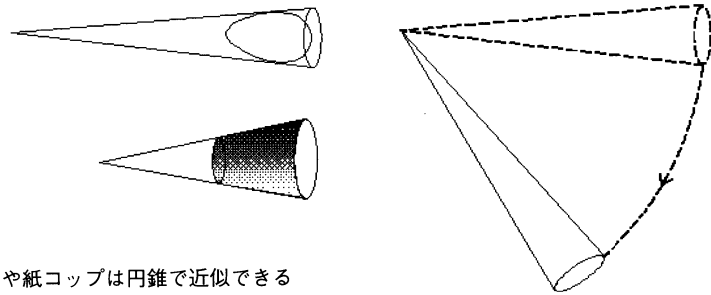


図4 卵や紙コップは円錐で近似できる

また、斜面でなくて水平な面でも卵や紙コップは遠くへ転がらないという特性がある。親鳥が雛をかえすために卵を抱いているとき、ひとつの卵が転がり出たとしよう。親鳥は卵をとり戻すために動くことが出来ない。円錐が円弧を描いて元の位置に戻るように、卵は円弧を描いて親鳥の元に戻ってくる。

2 卵形線

卵形線(らんけいせん)を描く方法にはデカルトとカッシーニの方法がある。デカルトは次のようにして卵形線を定義した(Descartes, 1637年)。基準となる円が2つある。中心 O_1 で半径 r_1 の円と、 x 軸方向に a だけずれた中心 O_2 で半径 r_2 の円である。それぞれの中心を通る平行線を2本描き、相手の円との交点をB, Aとする(O_1B と O_2A が平行)。直線 O_1A と直線 O_2B の交点Pが卵形線の座標である。 $m, n > 0$ とすると、 $m\overline{O_1P} + n\overline{O_2P} = \text{一定}$ の関係がある。 $m = n$ のときは楕円となり、基準円の半径が等しくなる($r_1 = r_2$)。図5は、Visual Basicプログラムによって描いたもので値を $a = 1, r_1 = 1.2, r_2 = 1.8$ とした。確かに卵の形をしている。

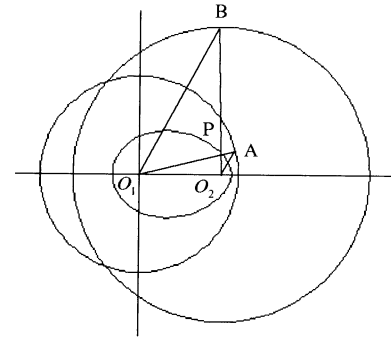


図5 デカルトの卵形線

卵形線を描くもうひとつの方法にカッシーニの方法がある。カッシーニは次のように卵形線を定義した(Cassini, 1680年)。2つの定点(あるいは焦点)A, Bからの距離の積が一定である点Xの軌跡は卵形線を描く(図6)。A, Bの中点Oを原点とし、A, Bを結ぶ直線を x 軸とする直交軸に関するその方程式は

$$(x^2 + y^2)^2 - 2a^2(x^2 - y^2) = k^4 - a^4$$

となる。ただし $\overline{AB} = 2a, k^2 = \overline{AX} \times \overline{BX}$ 。特に $a^2 = k^2$ ならば、Oは曲線の結節点となる。この場合、この曲線をレムニスケート(Lemniscate)という。カッシーニの卵形線は陰関数で表示されるのでこのままでは作図できない。この関数に $x = r \cos \theta, y = r \sin \theta$ を代入すれば次の極座標による方程式になる。

$$r^2 = a^2 \cos 2\theta \pm \sqrt{a^4 \cos^2 2\theta + k^4 - a^4}$$

前者の方程式から卵形線を描くには等高線を描くソフトを使う。後者の方程式からは Visual Basic プログラムで比較的簡単に作図できる。

楕円の場合は2定点からの距離の和が一定であるが、カッシーニの卵形線は距離の積が一定である。 $k > a$ のときが外側の曲線で楕円的卵形であり、 k が小さくなるにつれて $x = 0$ のあたりで細くなり、 $k = a$ のときが原点 O で交差するレムニスケート曲線となる。 $k < a$ のとき曲線は2つにわかれ卵形となる。図6は $a = 1$ に対して $k = 1.4, 1.2, 1, 0.98$ のときの図である。一番内側の曲線は、ここで議論している卵の形をしている。

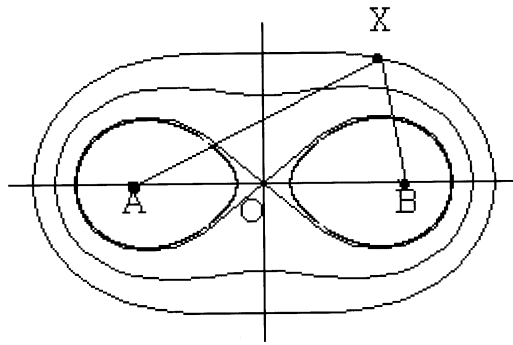


図6 カッシーニの卵形線の定義

カッシーニ (1625~1712) はイタリアの天文学者でルイ14世に招かれパリ天文台初代台長となる。木星・火星の自転周期を測定、土星の環の空隙と4個の衛星を発見、火星・太陽の距離を算出するなど多くの業績をあげた。カッシーニは惑星の軌道を卵形線であると考えたが、実際は焦点の一方に太陽が位置する楕円軌道であることをニュートン (1642~1727) が示した。また、トラス (ドーナツまたは浮き輪) の回転軸に平行な面で切断すると、その断面がカッシーニの卵形線となるなど興味のある性質がある。

3 卵の形もいろいろ

生物学上は、卵 (らん) は卵細胞をいうが、普通はそのうち体外に産み出されたものをいう。細胞質中に栄養物質である卵黄を含み、そのまわりは卵白などさまざまな物質で覆われる。卵の大きさはジンベイザメで68cm×40cm、ダチョウで

16cm×12cm、ハチドリ的一种では1.2cm×0.8cmなどである。(私は2005年度にケンブリッジに留学する機会を得た。休日を利用してロンドンの自然史博物館を訪れたとき卵の展示があり、これらを見ることができた。) 卵の形に注目して分類してみると卵形、洋梨形、円形、楕円形の4つに分かれる (図7)。

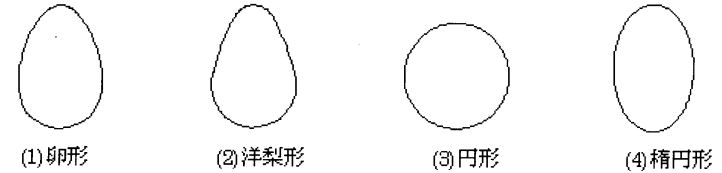


図7 形の分類 (『鳥類の図鑑』小学館 P.158より)

卵形の代表はニワトリの卵である。洋梨形はウミガラスやウミスズメなど海鳥に多く、卵形より尖端と鈍端の差が大きい。円形はウミガメ、楕円形はダチョウに代表される。

ニワトリは今では平坦な場所に卵を産むので転がって割れる心配をしなくてよいのだが、卵形になっている。親鳥が卵を抱いて暖めるとき、転がって遠くに行かず円弧を描いて戻ってくるために卵形なのだろうか。ウミガメは砂浜に卵を産み、ダチョウは草原に卵を産み、どちらも平坦な場所なので転がる心配をしなくてすむので円形や楕円形であることが理解できる。ウミガラスやウミスズメは狭い岩棚に卵を産む。岩棚は傾斜していることが多いので、洋梨形である理由もうなずける。海鳥でもカモメやカツオドリはこの形をしていないため、転がる心配があるので巣をつくっている。このように考えてみると、なるほど卵が卵形である理由も理解できるのである。宜 (うべ) なるかな。

4 ダーウィンの進化論

卵 (たまご) はどの時点で卵形になったのだろうか。卵の形は最初から決まっていたのか、それとも後から決まったのだろうか。

ダーウィンの進化論というのがある。自然淘汰説または自然選択説ともいう。進化の要因論としてダーウィンとウォーレスが同時平行的に到達した説で、生物は原則として多産性で、そのために起こる生存競争の結果、環境により適応した

変異個体が生存し、その変異を子孫に伝える。このため生物は次第に環境に適応した方向に向かって進化するという考えである。ダーウィンはこの説を『種の起原』において本格的に論じ、それによって進化論は広く認知された。20世紀に入っても現代の進化論の中心的な位置を占めている。『種の起原』は岩波文庫に収録されているので一読をすすめる。

卵の形は次に示すように、ダーウィンの進化論を裏付ける材料のように思える。ここに卵の構造を示す(図8)。卵は卵のからである卵殻(らんかく)、卵を割ると通称しろみの卵白(らんぱく)、通称きみの卵黄(らんおう)、卵黄を固定するカラザ、鳥のからだのもとになる胚盤、気室、卵殻膜などで構成される。意外なことに、ニワトリの卵殻は確かに卵形をしているが、卵を割って中の卵黄をとってみると球形に近いことである。卵黄は、球である。重力の影響を受けるためわずかに歪むが基本は球である。

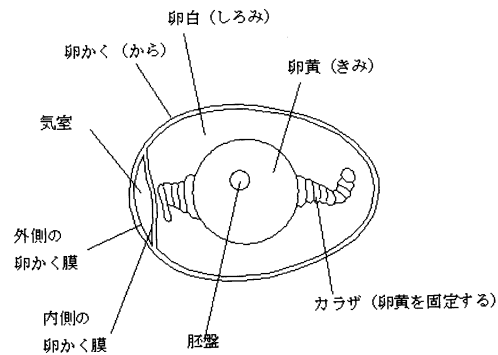


図8 卵の構造 (『鳥類の図鑑』(小学館) P.160より)

皆さんは、鶏肉店の店頭にときおり「玉ヒモ」として売られている、ニワトリの卵巣と輸卵管をご存知であろうか(図9)。卵や鶏肉以外に、この臓物が売りに出されていることがある。「玉ヒモ」の玉はニワトリの卵巣であり、ヒモはニワトリの輸卵管である。卵を産まなくなったニワトリを鶏肉にするとともに、臓物である玉ヒモも昔は栄養があるといって結構、重宝にされた。にわとりは1日に1個の卵を産むが、これから産もうとする卵の生成過程を一度に見ることができる。

卵巣にはぶどうの房のように多くの小さな卵黄があるが、どれも球に近い形を

している。十分に大きくなった卵黄はろう斗部から輸卵管に入り、たんぱく質の分泌を受けながら卵白と卵殻膜(いわゆる「うす皮」)を形成していく。子宮部では石灰質の沈着により卵殻(から)が形成される。ろう斗部から輸卵管を経て放卵されるまでの時間は約24~27時間であり、輸卵管の全長は70~75cmである。卵殻の形が決まるのは排泄する瞬間ではなく、19~20時間滞留する子宮部で決まる。子宮部では飼料中のカルシウムが卵殻の形成に関わる。カルシウムが不足すると卵殻が薄くなる。卵巣での卵黄は球であるが、排泄部での卵殻は球のままであったり、楕円形になったり、卵形になったり、洋梨形になったりするのである。

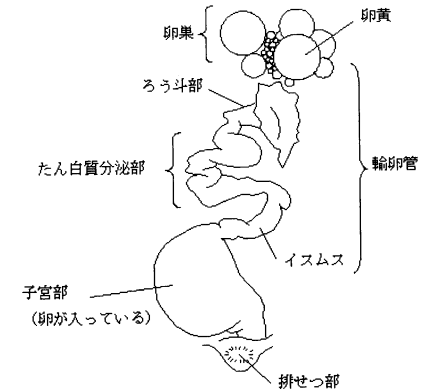


図9 卵巣と輸卵管 (斎藤昌蔵『にわとりと卵』同和春秋社より)

岩棚に産み落とされた卵が円形や楕円形であれば転がり割れてしまい、その種は減じたであろう。産み落とされた卵が偶然にも卵形や洋梨形であったため転がらず、その種は保存されたのであろう。このように考えると、卵巣から排せつ部まではわずかに数十センチメートルの距離であるが、この距離には始祖鳥(ジュラ紀)以来の進化の歴史が集約されているように思える。

(参考文献)

- (1) 西山豊『卵はなぜ卵形か』(日本評論社, 1986年) p11~p26

(大阪経済大学)